

第六十六回 京都観世能

助成

文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人日本芸術文化振興会



安宅



大原御幸

令和6年10月27日(日)
午前11時始(10時開場)
京都観世会館(京都市左京区岡崎円勝寺町44)



恋重荷

ご予約・お問合せ 京都観世会館

TEL. 075-771-6114
<http://www.kyoto-kanze.jp>



チケット販売サイト

+++ 入場券 9月1日(日)午前10時発売 +++

S	席 (1階正面指定席)	13,000円
A	席 (1階脇正面中正面指定席)	11,000円
B	席 (一般2階自由席)	6,500円
学	生 (2階自由席のみ)	3,500円

主催 公益社団法人 京都観世会

第六十六回 京都觀世能

令和六年十月二十七日(日) 午前十一時始

(能)

義経 味方 遙

同山 樹下 千慧

〃 梅田 嘉宏

〃 浦部 幸裕

〃 田茂井 廣道

〃 吉田 篤史

〃 河村 和貴

〃 大江 広祐

〃 大江 泰正

〃 古橋 正邦

武蔵坊弁慶 味方 玄

安宅

勅進帳
延年之舞

富樫某 福王 知登

河村 大 杉 信太郎

太刀持 茂山千之丞

強力 茂山 茂

後見 井上 裕久 橋本 光史

地謡

寺澤 拓海 吉浪 壽晃
谷 弘之助 吉田 潔司
深野 貴彦 杉浦 豊彦
松野 浩行 河村 晴久

二千石

主人 茂山七五三 太郎冠者 茂山 逸平

(狂言)

後見 鈴木 実

(二時半頃)

休憩二十分

法皇片山 伸吾

大納言 宮本 茂樹

阿波内侍 橋本 忠樹

女院片山九郎右衛門

大原御幸

萬里小路中納言 宝生 欣哉

大臣 小林 努

奥鼻 宝生 尚哉

奥鼻 小林 克都

間 供人 網谷 正美

(能)

國川 純
吉阪 一郎
杉 市和

休憩十五分

(仕舞)

氷室 分林 道治

江口 青木 道喜

梅枝 井上 裕久

殺生石 浦田 保親

(四時過)

(能)

女御 松井 美樹

山科莊司 河村 晴道

恋重荷

臣下 福王 和幸

間 臣下の從者 島田 洋海

谷口 正壽 前川 光長
林 吉兵衛 森田 保美

附 祝言

(終了予定 五時二十分頃)

後見 青木 道喜
大江 信行

味方 團

地謡

樹下 千慧 田茂井廣道
井上裕之真 浦田 保親
大江 広祐 浅井 文義
河村 和晃 分林 道治

地謡

浅井 風矢
武田 邦弘
橋本 雅夫
橋本 磯道

後見 大江又三郎 鷺尾世志子

林 宗一郎

地謡

河村浩太郎 橋本 光史
大江 泰正 河村 博重
河村 和貴 浦田 保浩
吉田 篤史 越賀 隆之

「ごあんない

安宅 勸進帳 延年之舞

兄頼朝の命により平家を壇ノ浦に滅ぼした源義経は、都を守護していたが、梶原景時の讒奏や、人心を集めた義経への頼朝の危機感から、都を追われる身となった。義経が若年期を過ごした奥州平泉の藤原氏を頼み、一行は山伏姿に身をやつして北陸道を逃走する。頼朝はこれを探えるため、各所に新聞を設けていた。

安宅の湊（石川原小松市辺り）に着いた一行は、安宅にも新聞が立ち、山伏を探えることを知り、弁慶の計略で義経を剛力（荷負いの人夫）に仕立て、関の突破を謀る。しかし関守は、山伏はすべて討ち取るとして通してはくれない。ならば尋常に討たれようと、最期の勸めを始める。その勸めの言葉の中で、真の山伏を討ち取れば熊野権現の罰が当たると感ずく。関守は怯み勸めを制す。そして今度は勸進帳（チャリテイの趣意書）を読めと所望する。弁慶は関守に、自分たちは東大寺再興の勸進の山伏だと偽っていたのだ。弁慶は即座に、勸進帳とは無関係の巻物を取り出し、即興で勸進帳を読み上げる。関守は感服し、一行を通す。しかし剛力姿の義経が怪しんで、留められる。一行は刀に手を掛けるが、弁慶はこれを抑え、この剛力が主君ではないことを証するため、金剛杖で散々に打ち握る。それでも剛力を留めようとする関守に対し、荷負いの剛力に目を懸けるのは盗人であろうと、刀に手を掛け一丸となって迫り来る山伏たち。終に関守は一行を通す。

関を通れ、一行は休息をとる。弁慶は、主君を打ち握えた非礼を涙ながらに詫びると、義経は、今の機転は天の加護と慰める。そして自らの不運を嘆く。

関守は先刻の非礼を詫びるため、一行に追い着き酒を勧める。弁慶はこれを受け、延年を舞い、急ぎ奥州へ下っていった。

判官最良という言葉があるが、九郎判官義経はまさに、武家社会の抬頭とその成果としての鎌倉幕府の樹立のために頼朝に利用され、捨てられた悲劇の英雄と言えよう。日本人には、体制の大義に裏付けられた権力者より、その陰で滅ぼされていった悲運の者たちに憧憬を抱く傾向がある。能作者もまた、大義より人間性を重視する人々の方に視点を置いていることに注目したい。

「勸進帳」は、シテ一人が勸進帳を読む小書（特殊演出）。「延年之舞」は、「男舞」の途中で囃子が特殊な演奏に変わり、シテは自ら掛け声を掛けて勇壮に飛び上り、「延年」を真似ぶ。

大原御幸

安徳天皇を初め、平家の一門は壇ノ浦に沈む。帝の母・建礼門院徳子も入水するが、源氏の武士に引き上げられ、命ながらえて大原の寂光院に籠り、平家一門の菩提を弔っている。

後白河法皇は、女院（建礼門院）を訪うため、大原へ御幸されるとのこと。その御幸の道の清め（整備）をなすよう、臣下が告げる。

寂光院では女院が、同じく尼の姿となった阿波内侍と大納言局と共に、平家一門の菩提を弔いつつそりと暮らしている。都を離れ、俗に交わらず、仏に仕えることだけが心の安らぎである。女院は今日も、仏に供える花を摘みに、大納言局を伴い山へ上る。

法皇の一行は、青葉に遅桜が残る大原へ御幸を進め、寂光院に着く。内侍は萬里小路中納言に、女院の留守を伝え、中納言は法皇にこれを伝える。法皇は女院の帰りを待つ。

山より帰ってきた女院に、内侍が法皇の御幸を伝える。突然の来訪に女院はあの悲しい現実を引き戻されてゆく。水に月を写せば、そこには我が子安徳帝の面影が映り、遠山にかかる白雲は、花が散るよう消えていった平家一門の形見に思える。そして法皇との再会。法皇は、女院が生きながらに見たという六道の有様を語らせる。女院は戦の地獄のような体験を、苦しみながら語る。法皇は更に、安徳帝の最期を語れと言う。女院は教経の最期、知盛の最期、二位殿と安徳帝の最期、そして自らの入水を語り、法皇との再会の辛さ悲しさに涙を止めることができない。

やがて還幸の時となり、都へ帰る法皇を、女院は涙を堪えて見送る。

世阿弥は「平家物語」に取材し、多くの修羅能を書いた。禪竹は「熊野二十手」「小督」（*「弘原」「二人静」）など、女性の視点から「平家物語」を取り上げている。作者不詳ながら、禅竹的な構成や言葉遣いが伺われるこの「大原御幸」にも、女性の価値観から見えてくる、戦の虚しさや悲しさが描かれているのではないだろうか。

*この二曲は禅竹作の可能性があるもの。

恋重荷

白河院は菊を寵愛されていた。山科莊司という老人が、その菊の世話をしていた。あるとき莊司は、女御（帝の妃）の姿を垣間見、恋をしてしまう。以後仕事に手につかない。臣下が莊司を呼び出し、恋をしているのは真かと問い糺す。莊司は、何故ぞ存知かと肯定する。そこで莊司に課題が与えられる。「恋重荷」と名付けられた美しい荷を持って、庭を百度も千度も廻れば、その間に女御が姿を見せやろうというのである。莊司は、女御に今一度会いたい一心で荷を持ってとうとするが、持ち上げることさえできない。恋するゆえに持てぬ重荷と、命を懸けても軽すぎる自分の命。それでは恋のため、何としても持とうとする莊司。遂に力尽きてしまう。それならば恋死し、この怨みを女御に思い知らせようとうと命を絶つ。

莊司の死が臣下に伝えられ、臣下は莊司を哀れに思う。恋重荷とは、莊司の及ばぬ恋の心を止めるために、持つことのできない岩を美しい錦で包んで軽く見せ、恋が叶わぬゆえに持てないと思つて莊司は恋を諦めるであろうという方便だったのだ。臣下は莊司の死を女御に伝え、女御は臣下に促され、莊司の死骸を見、憐みの歌を詠まれる。しかしそれより、身動きができなくなる。やがて悪霊の姿になった莊司が現れ、岩の重荷が持てるものと怨みを述べ、女御を責め立てる。その後、跡を弔われた悪霊は怨みを翻し、女御の守り神となって、千代の影を守つてやろうと言つて帰つてゆく。

古曲「綾の太鼓」を世阿弥が改作した作品と考えられる。鳴らぬ鼓を老人に打たせる他流の「綾鼓」が、原曲に近い形であろう。世阿弥はモチーフから恋重荷に変え、より詩的に、また恋そのものの本質を重荷と捉えることに成功している。うら若い女性と老人、帝の妃と庭掃きの人夫。恋などあり得ないと思われたが、老人は命を捨てることで恋を成し遂げている。しかも「千代の影を守らん」とは、永遠に恋し続けるという強烈な意思表示とも受け取れる。恋の普遍性、永遠性を見事に描いた曲と言えよう。

（河村晴道）

京都観世会館アクセス



- ◆京都観世会館へは
 - JR京都駅から
 - 市バス[5]で「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車(乗車時間約30分)
 - 市地下鉄烏丸御池にて地下鉄東西線乗り換え「東山駅」下車(乗車時間約20分)
 - 阪急京都河原町駅から
 - 市バス[31][46][201][203]で「東山仁王門」下車(乗車時間約15分)
 - 京阪三条駅から
 - 市バス[5]で「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車(乗車時間約7分)
 - 地下鉄東西線で「東山駅」下車(乗車時間約1分)
 - JR 2条駅から
 - 地下鉄東西線で「東山駅」下車(乗車時間約8分)
 - 山科・醍醐方面から
 - 地下鉄東西線で「東山駅」下車(乗車時間約9~17分)
 - 地下鉄東西線「東山駅」下車
 - 1番出口から徒歩約5分
 - ◆会館東隣に有料駐車場(約20台)がございます。

- ◆字幕解説サービス(和・英文対応)をご利用いただけます。(千円/予約可)
- ◆上演中の客席へのお出入りはご遠慮ください。
- ◆事務局で許可した方以外の写真撮影・録音・録画は固くお断りいたします。
- ◆上演中は、携帯電話の呼出音を切り、スマートフォン等の画面が光らないようご注意ください。
- ◆都合により、出演者等が変更になる場合がございます。予めご了承ください。

【表紙写真】

《安宅》	味方 玄	(金の星渡辺写真場 撮影)
《大原御幸》	片山 幽雪	(金の星渡辺写真場 撮影)
《恋重荷》	片山 幽雪	(金の星渡辺写真場 撮影)